

言靈百神・

言靈精義・言靈開眼における

＜神＞への言及

天沼矛

現象的に直截に説明すれば言語を発する器官である舌のことである。

舌は矛（鋒へほこ）の形をしている。然し舌は舌だけで活動するわけではない。

舌は心で動き、心を言葉にまとめ上げて宇宙の事を表現する宇宙の機関の一つである。

この舌を縦の次元の意味に使えばアイウエオの五母音 五行 五大が現われ、

横の時間空間の意味に用うればキシチニヒミイリの八父韻 八卦が現われる。

又ボコの又は貫（横）、ホコは靈凝で、八父韻の発現には特に舌の活動を要する。

「敷島の大和言葉をとてぬきにおける賤機の音のさやけさ」（昭憲皇太后）

天沼矛はすなわち劍、または太刀である。神劍であり靈劍である。

古来宗教書には劍と云う語が極めて多く用いられている。

「おのづから旋轉まわる焰の劍」（創世記） 「我が来るは劍を投ぜんがためなり」（馬太伝）

「珍重す大元三尺の劍」 「両頭を截断すれば一劍天に倚よつて寒し」

「三十年来劍を求むるの客」などと云われ、神道に於てもまた

「天叢雲劍」 「草薙劍」 「高倉下の劍」 「韓鋤の太刀」 「十拳劍・九拳劍・八拳劍」等の

名がある。知性の劍の活らきを銅鉄の劍を以て咒示じゆし象徴したものである。



元来宇宙が割わかれると云うことと、

その宇宙が割わかれることが人間に判わかると云うことは同時であり、

表裏をなすことであり、不二一体の事柄である。宇宙がワカレルことを割判ぼっはんと云い、

そのことが人間にワカルことを判断と云う。判断がなければ割判ぼっはんはなく、

割判ぼっはんがなければ判断もない。宇宙が先ず陰陽両儀に割わかれると云うことは

同時に既に人間の最初の判断である。

この漂える国をつくり固め成せ

人間に与えられた役割は、

先天17言霊を活用して宇宙の森羅万象を創造し、次いで、その森羅万象を整理し、活用して人間が住むにふさわしい文明世界を建設せよ、と言うのです。

但し、此の場合宇宙を創造すると云うことは太陽や星辰や、

河海山野動植を作ると云うことではない。そうした物件自体を一体何者が作ったかと云うことは人間には不可知不可解に属することである。

これを架空の観念の神なる者が作ったと仮定し、そう信じることは自由であるが、それはそれだけに止まることで真理にはならない。

古事記は不可知不可解の内容を独断した観念の遊戯ではない。

古事記には、古事記のどこにも神が何かを創造したという記述は一切無いのです。

人間が森羅万象のすべてに名前を付けるための言葉を

言霊として与えたとしか記述されていないのです。

森羅万象が生まれると云うことはその名が出来ると云うことである。

森羅万象が有ると云うことは一つ一つその名が有ると云うことである。

「天津神諸の命」の修理固成の命令はその天津神そのものである先天、天名に基づいて宇宙間のすべての要素の名を定め、その名の原理すなわち原理の言葉を以て万物を命名し、その原理ある言葉を指導原理として国家、社会、世界を組織し、建設し、経営せよと云う生命の命令である。名は万物の母であり、言葉が万物存在の根拠である。

人間が創造する文明の実体は言葉であり、

言葉として組織された世界が人間によって生み出された最初の国であり、

文明の発展は言葉の発展である。

この事の意義を先ず充分に弁えないと、

これから先の岐美二神の創造の意義を理解することが出来ない。

おのころしま

淤能碁呂島

「おのれのころのしまりの義」

己の心の締まりの義。言語は心の表現であり、空相実相の諸相の名であるが、宇宙の基礎的要素の名を表現するに単音を以てして、その全局が五十音である。その五十音は碁盤の目の如くに縦横に配列されるから碁の字を宛ててある。

※「二神天霧（ふたはしらのかみさぎり）の中に立たして曰はく、

吾れ国を得んとたまひて、すなわち天瓊矛（あめのぬぼこ）を以て

指し垂（くだ）して探りしかば、礮馭盧島（おのころしま）を得たまひき、

即ち矛（ほこ）を抜きあげて喜び曰はく、善きかな国のありけること」[※]（書紀）。

その始め人類が渾沌（こんとん）の中から初めて言語を以て己れの心を、すなわち事物を表現し得たことの喜びである。

「ただ天霧（さぎり）のみありて薫（かお）り満（み）てるかも」と云う

清浄にして一塵も止めぬ始原の宇宙にあつて、

初めて人間が、すなわち神が自己の心を表現する言語と云う

芸術を生み出した喜びである。（言霊百神 55頁）

現象の単元、子音

タトヨツテヤユエケメ

① 天の真奈井の扉を開いて全陽性である夕音がいきなり躍り出て来る。大事忍男神（おおことおしをかみ）と云う。

易で示せば乾为天（けんいてん）の卦であり、仏教を借りて云えば一大事因縁と云う。

何故人間が言語を発し、その言語によつて森羅万象を認識表現するか、

それは人間精神の先天的基本構造がトヨ（十四個）の父母音であることに存し、

その先天が意識以前の無意識の段階に於て活動し組合わされて言語即心象即現象として

全宇宙の内容を識別表現する。その宇宙の全内容の全的端的な顕現出發が、

タ（田、五十音）音である。識別表現はそのまま創造であり、

人間は中今の各瞬間毎に宇宙の創造を行っている造物主すなわち神である。

クムスルンセホへ

② 湧き出て来る知情意の各々が確実に自己を表現するに必要な

肉体発声器官機能を使役して言語の要素が構成されて行く様相である。

フモハヌ ラサロレノネカマナコ・ン

③ 音波となった意志の波動が、息吹きで体外に出て空中を飛翔伝達され、

その音が耳朵（みみたぶ）に入り鼓膜を刺激して、中耳を経て元の出発点である

頭脳の思惟中枢へ帰つて行つて「聞し召」される。

若しくはその音波が他人の耳に入つて聞かれて言葉として承認される過程である。

一般に誰も気が付かぬ事だが、此処で注意しなければならぬのは、人間の発する音波は耳に聞かれ、

頭脳に認識されて初めて言葉（ナ・名、コ・子）となることである。

真奈井から出た当初は無音の理念であり、空中に漂つて居る間は無音の空気振動（音波）に過ぎない。

言葉は自己又は他人に聞かれて初めて言葉となるのである。

この人間の機能を忍穂耳命（おしほみみのみこと）と云う。言葉を聞く生命の作用である。

人間は自分で発した言葉を自分で聞いて自分で確認する。

すなわち頭脳の真奈井から発した言葉は再び真奈井に還つて来て出發の時の理念と

帰還の時の言葉の姿が照合されて、其処に存在する先天によつて誤りなき事が自証される。

この途中で障害や混乱が起こつて自証がなされない言葉は夢中の戯言であり、

上すべりの観念であり、うる覚え、聞きかじりの言葉である。

日本人が昔から親しんで来た和歌や俳諧は自らの言葉を自ら正しく納得し、

人にも納得させるため修練である。以上を省みれば、夕音以下三十二音の誕生を、

現代の学問の範囲内で説明すれば、子音発生のサイコロジであり、同時にそのメカニズムである。

生命意志は宇宙万物の、
そして人類文明の創造者、
造物主である。

その生命意志を把持運営する者は、
架空に信仰される神ではなく
人間そのものである。

これを国常立尊くにのじたちのみりと云う。
国くには即ち地くにである。

予言の時が来て立春節分に
国常立尊が

正に世界に出現した想いである。

国常立尊は

人間自身の中から現れて来た。